

## (1999年春号) 自然保護第一号? ～藻岩山～

汽車であれ車であれ、どこかに遠出をしての帰り道、藻岩山の姿が見えるとなぜかほっとする。札幌で生まれ育った者としては当り前のことなのだろうが、それにしても、ふるさととの山というのは不思議な霊力でも持っているかのような気がする。

私が子供の頃に住んでいた所は、通称“山鼻”と呼ばれていた。通っていた学校も山鼻小学校である。山鼻は藻岩山の山麓に位置していて、つまり山の端にあるという意味で、これを山鼻と当て字したのが地名の由来だという。屯田兵が開墾した土地であり、私の子供の頃は、円山地区とならぶ、札幌の住宅地だった。

住宅地といっても家はまだまばらで、空地や畑が多く、冬は家からスキーをはいて、畑をまっすぐつつ切って山へ行くことができた。

藻岩山は小学校の校歌にもあり、年に一度は登山遠足もあった。学校前の行啓通りをまっすぐ西へ行くと登山口、今は立派な病院になっているが、当時養老院と呼ばれていた建物の横から山道に入った。

登り始めるとこの山は展望がきかない。おといかぶさって来るような木の間をひたすら歩くだけだ。時には濡れた場所、木の根が張り出した所など歩きづらい道を、何人追い越したとか、抜かされたとかいいながら、ひたすら頂上をめざしていたように覚えている。

この山が天然記念物に指定されている事は小学校で教えられていたけれど何のこともやら興味もなかった。山との最初の出会いはこんな程度のものであった。

所でこの天然記念物指定のきっかけを作ったのは、アメリカのハーバード大学の樹木学者サージント教授だ。教授は明治二十五年(一八九二年)に日本を訪れ、札幌にも来た。そして著書「日本森林植物誌」で藻岩山の樹木にふれ、同じような気候で狭い地域にこれほどの樹種が原生しているのは世界的に珍しいと記述した。

明治期の北海道は札幌ばかりでなく各地で開拓が進み農地が拡大していった。一方原始林は減少していく。そこで道庁は明治の末から大正にかけて、道内の代表的な原始林を保存することとし、藻岩山も地続きの円山と一緒に、大正四年、原生天然保存林に指定された。そして大正八年国に天然記念物保存制度が誕生すると、大正十年に、円山と藻岩の原始林は、北海道第一号の天然記念物に指定された。

藻岩山に原生している樹種は百七種。全道でおよそ二百種強だそうだから、北海道に自生している木のおよそ半分が藻岩山という極めて小さな地域に太古の姿そのままに残っているわけだ。

いずれは人口二百万人にもなるかと思われる大都市に密着して、こんな山が残っているなんて、確かに百年以上前のサージント教授の記述を借りれば「世界にまれな例」だ。

藻岩原生林の保護にはさらにその前がある。明治のはじめ、札幌の街づくりが始まった頃、内地からこゝへ移り住む人たちが飛躍的に増え行った。当然、住いを作る木材がいる。冬には薪が必要だ。近郷の山から木を伐り出さねばならない。その木が最も近くにあるのが藻岩山であり円山であった。が、こゝから木材を伐り出せばどうなる。札幌の街のシンボルがハゲ山になってしまう。「街から見える山を裸にするのはやめよう」と開拓使は考えた。そしてうれしいことに、我々の先達である最初の移住者たちも、両手を挙げて賛成し協力したのである。

明治六年には、札幌周辺に「官林」を定めて保護にあたり、禁伐林としたのだ。木材は、手稲山や定山溪途中の藤の沢あたりから得ることにした。

市街地から見える藻岩・円山の自然景観を守ろうとした、我々の先達の意志が、その二十年後に来札したサージント博士によって、学術的にも世界で珍しいと評価されたわけだ。

こうしてみると、ひょっとして、日本近代の自然保護活動の第一号こそ、明治のはじめのこの原生林保護ではなかったのかと考えるのだが、どうだろうか。

藻岩・円山の樹は伐らないという約束は、以降ずっと守られ続けて来た。戦中・戦後のあの極端な物不足の時ですえそうだった。食糧も不足だったが、燃料もなかった。藻岩の樹木を伐り出せば冬の寒さの幾分かはしのげただろう。でも誰もそんな事はしなかった。それは市民の誇りであり、心意気でもあったと思う。

だが、戦後、我々にとって正に衝撃的な出来事が起こった。札幌に進駐していた占領軍がいつも簡単に山の一部の樹を倒してしまったのだ。目的はスキー場。もちろん現在のスキー場ではなく、市街地からも見える個所だ。当時日本人立入り禁止のスキー場は、今ではそれとは分らなくなってしまっているが、正直言って、スキー場ができた時、私自身、子供心にも、「戦争に負けるというのは、こういう事なのだ」とつくづく思ったものだった。まさに「勝てば官軍」だった。この暴挙には宮部金吾博士が、九十歳近い高齢にもかかわらず、占領軍に出向いて抗議されたそうで、そのせいで、伐開は最小限で済んだとも聞いている。

その後、藻岩山には麓から少しずつ住宅がはい上がって行った。もちろん天然記念物の指定区域外である。街なかから眺めると、こうした住宅群が目に入るが、かつて藻岩中腹は二つの建物しかなかった。一つは浄水場、もう一つは北海廟だった。

浄水場は昭和十二年の建設、簾舞ダムから山中の水路を通してこゝへ原水が運ばれ、浄化されて市内へ配られる。現在は水道記念館にもなっている。かつてコンクリート造の建物など、市内に数えるほどしか無かった時代、中腹のこの浄水場は、札幌近代のシンボルのようにも見えたものだ。

それと対照的だったのが、浄水場の南隣りに位置する北海廟、墓地を従えた古風な造りは、五重塔を連想させ、この新旧二タイプが並んでいる光景は心を和ませてくれた。

藻岩山、標高五三〇メートル。アイヌ語ではインカルシベと呼ばれていたという。物見をする山という意味だそう。それが、隣の円山の呼称のモイワ(小さな山)と取り違えられて藻岩山となったという。

春の山を例えて“山笑う”という。藻岩山の笑う季節が来ている。